

東日本大震災 | 連続ルポ2 | 仮すまいの姿

Great East Japan Earthquake | Serial Report 2 | Life in Temporary Housing — no.18

弱い絆の強さ——沖縄県における原発事故避難者レポート

The Strength of Weak Ties——The Nuclear Refugees Fleeing to Okinawa

高橋征仁

Masahito Takahashi

山口大学人文学部教授 / 1965年生まれ。1993年東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は教育社会学・社会心理学だが、現在は進化心理学に転向中。リスク判断の多指向性(モジュール性)と感度のばらつきは、人類進化による遺産ではないかと考えている

人間の心は、まるでラチェットのように、遊動生活から定住生活に向けて一方向的にしか動かない。故郷を離れて異郷の地で暮らすということは、それに逆らう選択にほかならない。空回りして、疲弊してしまうのも仕方がない。それでも、福島から約1,700km離れた沖縄の人と自然は、ゆっくりと避難者たちを癒し、命をつなぐために活動する勇気を与えてくれる。弱い絆だからこそ、マイペースで自分の人生を取り戻すことができる。

遠隔地避難者に厳しい世間の目

復興庁の発表によれば、東日本大震災によって沖縄へ避難した人の数は、2013年3月の時点で1,000人を超えている。ただし、この数値には、関東圏からの自主避難者や一時的な滞在者が含まれていないため、実際には、この数倍の「避難者」が沖縄にいと推測される。読者のなかには、「なぜ、わざわざ沖縄まで?」と思う方も多いかも。しかし、そう思うのは、福島第一原子力発電所の事故が日本にもたらした災禍を過小評価しているからかもしれない。2年経った今でも、事故は収束しておらず、真実はまだ闇の中である。

沖縄をはじめとする西日本への原発事故避難者には、①神経質な過剰反応、②自分の子どものことしか考えていないエゴイスト、③インターネットの不確かな情報に踊らされたネット中毒者、等のネガティブなイメージが付きまとっている。放射能による健康被害が頭から離れないという意味で、「危険厨」や「放射脳」などと呼ばれたりもする。しかし、実際に避難者の方々と話してみると、そうしたイメージは偏見にすぎないことがわかる。

挫折感と罪悪感を背負って沖縄へ

沖縄の避難者に関して言えば、①神経質と言うよりむしろ豪胆な女性が多い。さまざまなしがらみを断ち切って、見知らぬ土地で暮らすことを決断し、実践しているのだから、当然と言えば当然である。しかも、大量の鼻血や口内

炎、下痢、湿疹など、子どもの異変に気付いて移住を決断しているケースが圧倒的に多い。新築の家や順調だった仕事、仲よしのママ友、ときには夫まで捨てて移住するのだから、並大抵の覚悟ではできない。しかも、避難者の多くは、自分たちだけ逃げようとしたわけではなく、親兄弟や友人にも一緒に避難を勧めたり、自分の危機感を周囲に説明しようとしたりして、失敗している。そのため、沖縄に来ている避難者には、②強い挫折感や罪悪感を抱えている者が少なくない。メディア利用に関しても、③TwitterやFacebookだけを情報源にしていたという人はいない。むしろ、TV画面に映る政治家や官僚、専門家たちの表情や目の動きにウソを感じてしまい、自分の直感に逆らえなくなったという人が意外と多い。「レベル7も、メルトダウンも、SPEEDIも隠蔽。避難区域設定もデタラメ、安定ヨウ素剤も不配。農作物は流通後に汚染発覚。それでも〈安全安心〉だなんて、どうして信じられるの?」——避難者のこうした問いかけに、私は、ただうなずくしかなかった。

ウチナーンチュのチムグクル(肝心)

沖縄に多くの避難者が集まったのは、物理的な距離の遠さ以外にも理由がある。東日本大震災の際、沖縄県内では「ウチナーンチュのチムグクル(真心、思いやり)」という言葉が掲げられて、熱心な支援活動が行われていた。なかでも、仲井眞沖縄県知事は、震災直後から数万人規模の避難者受け入れを表明し、渡航費や3食付きのホテルを無償提供するなど、県民の先頭に立って活動してきた。また、沖縄県内190団体が加盟している東日本大震災支援協力会議では、避難者たちに「ニライカナイカード」を発行し、加盟スーパーでの買い物5%引きやゆいレール無料、医療費免除等のサービスを提供してきた。

関東圏からの避難者や保養に関しても、恩納村の「つなぐ光」や石垣市の「ちむぐる」、久米島の「球美(くみ)の里」などの民間プロジェクトが活発に展開されてきた。ほかにも不動産業を営む女性ボランティアが格安で物件紹介するなど、個々人の活躍も光る。



図1 | 若者たちの手づくりフリーマーケットはびふる市とそのチラシ



図2 | 沖縄方言の掛け声に合わせて行うラジオ体操(うちなーぐち体操)



図3 | 避難者一人ひとりが自分の境遇と沖縄への感謝を表明した

避難者たちのアリア——感謝と再出発

沖縄での支援イベントは、とにかく明るい(図1・2)。歌と踊り、三線は欠かせない。子どもと女性がイベントの中心であり、ネクタイを締めた偉い男性が悲壮な決意を表明したりする儀式はない。青空の下、みんなで大笑いをして、それからゆっくりと前を向いていく。沖縄には、人生の不条理に抗いながら生きるための知恵があり、それを支えてくれる人々がいる。20代の若者たちが企画したフリーマーケット「はびふる市」(2012年7月)では、避難者一人ひとりが自分の言葉でこれまでの境遇を語り、受け入れてくれた沖縄の人々に感謝する場面も見られた(図3)。そのとき、彼女たちは、もう、ただの被災者ではなく、福島の子もたちに屋内運動施設をつくるために積極的に活動する支援者の立場に変わっていた。このようなレジリエンス(回復力)は、東北から遠く離れた、しがらみのない土地だからこそ、十分に発揮されたと考えられる。

じゃんがらの伝説——福島と沖縄を結ぶ縁

もちろん、避難者たちがそこに至るまでの道のりは、必ずしも順風満帆ではなかった。福島県人会やUターンやIターン経験者が、さまざまなかたちで、福島と沖縄の間を橋渡しする役割を進んで担ってくれた。そうしたなかで、じゃんがらの伝説が果たした役割も決して小さくないだろう。今から約400年前、磐城国生まれの袋中上人は、仏法を求めて明に渡ろうとして失敗し、琉球国にたどり着いた。そこで、琉球国王尚寧王の帰依を受けて、袋中上人(浄土宗)が広めたのがじゃんがら念仏踊りであり、それが沖縄のエイサーに引き継がれたとされる。沖縄の人も福島の人も、そうした故事に互いに感謝の念を抱きながら、支援や交流を活発化しようとしてきた。

震災から1年後の2012年3月には、福島から沖縄本島に避難してきた人たちが、「福島避難者のつどい 沖縄じゃんがら会」を結成して、活動を始めた。現在では、会員280名を数えるほどになり、①沖縄の人たちとの交流、②福島への支援活動、③被災者同士の交流事業などを

活発に行っている。今年2月には、宮古島で暮らす避難者や地元の方との交流会を行った(図4)。

じゃんがら会無料検診 & こころの相談会

しかしながら、避難者たちが、自分たちの生活を取り戻していくためには、まだまだ課題も多い。とりわけ避難者たちにとって大きな課題となっているのは、①住居の継続確保と、②就職・進学の問題、③健康問題である。特に遠隔地の避難者にとっては、子どもたちの健康問題が解決しない限り、復興も帰還も始まらない。実際、福島に残った親族が亡くなったり、体調を崩したりしており、不安も大きくなる一方である。

そこで、沖縄じゃんがら会では、避難者の健康管理を行うため、沖縄県医療生協や沖縄県臨床心理士会と協力して、「じゃんがら会無料検診&こころの相談会」を企画し、2012年10月から現在までに計3回実施してきた。これまでの受診者数は220名を数える。この会では、甲状腺エコーや血液検査、心電図、尿検査などを無料で受診できて、その結果を直接知ることができる。

原発事故の被害者であれば当然受けられるはずのこうした権利が、沖縄以外ではほとんど保障されていないのが、現在の日本の医療の現実である。被災地でも避難先でも、健康被害をめぐる問題は、決して小さくない。じゃんがら会と沖縄の医療生協や臨床心理士会による活動が、そうした日本の医療を変えていくための突破口となることを願ってやまない。



図4 | 宮古島の海で遊ぶ子どもたち